タイトル：平成 25（2013）年度　研究セミナー
日程：平成 25 年 12 月 13 日（金）～15 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階　マルチメディアセミナー室（306）

「20 世紀初頭の国境地帯を巡るアフガニスタン・英領インド間関係」
登利谷　正人（上智大学イスラーム研究センター　特別研究員）

アフガニスタン近現代における政治史を中心に研究を進めている私にとって、今回の研究セミナーに参加させていただいたことは非常に有益であったと実感しています。セミナーの冒頭の趣旨説明でも触れられましたが、博士論文を執筆するという過程は孤独なもので、博士論文の全体をどのようにとりまとめたら良いのかを模索中というような状況にありました。さらに、地域的にも周囲に専門的なアドバイスなどをいただける研究者が少ないということもあり、外からの意見を伺って自らの研究を進展させるという機会に乏しい状況でした。そのような中、多くの先生方から様々な視点からのご意見・ご質問などをいただいたことにより、博士論文全体の構想、さらには自らの研究そのものの方向性などについて今一度再考する良い機会となりました。第一線で研究活動を実施されている様々な分野の先生方からのアドバイスは、これからの研究活動の構想全体を描く上で大きな力となったと実感しています。

博士論文の中で取り扱おうと考えていた 20 世紀初頭のアフガニスタン・英領インド国境地帯のパシュトゥーン諸部族に対しての両国による調停活動や諸政策について分析するという内容の一部を今回のセミナーで報告させていただきました。しかし、博士論文全体の構想や流れや、扱う研究対象への視点などの点で今後の軌道修正とそのための具体的な研究目標がどの点であるのかということについて、諸先生方からのご意見などを伺って知ることができました。

また、他の参加者の方々の研究発表とそれに対する先生方の反応などを拝見することによって、自らの研究の在り方や研究活動における様々な視点の重要性を実際に知ることができたという点も非常に勉強させていただいた点でした。さらに、具体的に博士論文執筆までの研究活動や執筆中の生活や心がけなどを拝聴させていただいた「私の博士論文」の講演は、なかなか伺う機会の少ない執筆のための実際の作業工程や生活環境について知ることが可能という意味で極めて有益でした。

本セミナーは「中東☆イスラーム研究セミナー」と銘打っていますが、実際に参加した感想としては、他の地域について研究している方々にも間違いなく有益であろうと感じました。それほど、自らのこれまでの研究と今後の方向性を見つめ直し前進させる上で良い機会であると感じました。

このような機会を与えてくださった、近藤信彰先生はじめ諸先生方、およびスタッフの方々に感謝いたします。